

『不思議な清掃依頼』

霧赤忍

8,957 文字

あらすじ

紗奈は兄と清掃業を営んでいる。ある日、紗奈が帰宅すると兄が仕事を引き受けていた。使っていない診療所を使えるようにキレイにしてくれという依頼内容で、二人は関東から九州へ。山の頂にある診療所に到着し清掃を開始するが、そこは一筋縄ではいかない診療所だった……

肌寒さも感じる秋晴れの空。

二十四歳の私、伊藤紗奈は兄から、「ダッシュで行ってこい！」と指示され、おもちゃ屋さんでプラモデルの工具を買い家路を急いでいる。

自宅は一階を事務所にして兄妹で清掃業(家庭向けの掃除)を営んでいる。両親は十年前に事故で他界しているので、兄妹二人で互いに助け合い生活し、事務所を切り盛り……私が家の掃除、洗濯、ご飯のしたく、買い物までこなし、清掃の仕事も一人でやっている。

三十歳の兄は一日中、プラモデル作りに励み仕事をするのはまずない。

兄は端的に言えば残念な男だ。端正な顔立ちだが彼女はおらずプラモデル一筋の人生を歩んでいる。家の棚という棚にロボット、自動車、城などの建築物のプラモデルをビッシリ並べ近所の小学生相手に、得意げに独自のプラモデル哲学を語っている。

そんな兄だが頼りになる一面もある。両親が死んだとき、兄は大学を辞めて私の面倒をみてくれた。大学まで通わせてくれたし、就職活動に失敗して途方に暮れていた私を雇ってしてくれた。その直後働かなくなったが……。

過去の恩があるので指示には従順に応じているが、私一人に仕事をさせてないで手伝えよ！ と心の中で雄叫びをあげることもしばしばある。

「ただいまー……」

おや、珍しい。事務所兼リビングに入ると兄が電話をしている。仕事の依頼のようだ。

電話を終えた兄がどや顔で私を見つめる。

「紗奈。ビッグ案件だ。掃除するだけで五十万だぞ！ 助かったー！」

「ホント？」

五十万円！ 二時間で五千円の片付けや草取りばかりの私には天文学的数字だ。

「使ってない小さな診療所を使えるようにキレイにしてくれだど」

「診療所ってどこ？」

「九州」

「はいっ？」

九州？ ここは関東だよ。まさか一人で行かせないよね。

「服と清掃用具を今すぐまとめろ！ 俺も同行してやるから急げ。三十分後に出発だ」

「ええー今から！」

新幹線に乗り九州の指定された駅につくと、山神さんというふっくらした白髪のおじいちゃんが迎えにきていた。挨拶を交わすと昭和の匂いがプンプンする古い車に乗せられた。

車中、行先や仕事内容を質問すると、「運転中じゃ！」と怒鳴られてしまい無言の車内だった。兄はプラモデルの雑誌を読んでいた。

場所を把握したくて景色を見ていたが、街並みが徐々に緑一色の田んぼ道となり、わき道にそれたかとおもうと山を駆けのぼり始めた。途中、霧のようなものに包まれて一瞬視界を失ったが、山特有の道なき道を走り山の頂に到着した。深夜になっており夜の静寂に包まれていたが、遠望できないほど辺りが木々に囲まれていることはわかった。そこにぽつんと清掃依頼の診療所があった。平屋建ての小さな建物だった。

「ささ、よくぞ来なすった。中に入りなさい」

山神さんが車内とは打って変わり、満面の笑みで診療所を案内してくれた。

建物内は簡単な間取りで、入口すぐにトイレと待合室があり、テーブルとL字ソファが配置されていて十畳ほどの広さ、その横が診察室でベッドとデスクセットがあり八畳ほど、診察室の奥が倉庫で六畳ほど、以上だった。建物内は蜘蛛の巣が張っていて、床には泥汚れがこびりついていた。だがすぐに落ちそうな汚れで、半日もあれば清掃が終わりそうな気がした。

「それじゃ契約内容の説明をしようかの」

待合室のソファに腰かけると山神さんが話し始めた。

「ま、簡単じゃ。ここを使えるようにキレイにしてくれたらいい。それだけじゃ。清掃に入った翌々日にキレイになったか確認するからな。それで合格なら報酬を支払うよって」

「使えるようにキレイにですね！ 任せて下さい」

翌々日に確認……少し妙な感じがするが気にするほどでもないか。兄に目をやると車酔いしたのかソファにもたれて目を瞑っている。

「ホテルはこっちで用意したからな。明日からもここに送り迎えするから安心せい」

「ありがとうございます」

「今日は遠出で疲れたじゃろ。それじゃホテルに向かおうかの」

診療所から山を十分ほど下ると、一部整地された場所に小さなホテルがあった。木のぬくもりを感じる二階建てのホテルだった。

兄とはロビーで、「じゃあ」と一言だけ交わして別れた。兄はフラフラと出入り口のほうに歩いて行った。私は疲れていたもので、すぐに寝た。

翌日、診療所に到着。山神さんは私たちにお弁当を渡すと山をおりていった。

待合室のソファで、気になっていたことを兄に相談してみた。

「これで五十万円ってちょっとおかしくない？ だってこれ半日で終わるよ」

「確かにな。ああ眠い」

兄は昨日ホテルに戻っていないのだろうか、目を擦りながら欠伸をしている。

「翌々日に確認ってなんでかな？」

「まあ翌々日でもいいだろ。合格なら五十万払うって言ってるし、ちゃちゃっと掃除して帰ろうぜ」

「わかった……じゃあ掃除しよ？」

「紗奈、お前一人でしろ。俺は考え事したいからひとまず寝る」

チッと聞こえないように舌打ちをして掃除を始めた。

蜘蛛の巣をはたき落として、雑巾で床以外を拭いて、最後にモップで床を擦った。

「よし、いい感じ！ こんなもんでいいでしょ」

ソファで寝ている兄が邪魔だったが五時間ほどで掃除を終えた。

「ねえ、終わったよ」

寝ている兄を揺さぶった。なかなか起きないので強く揺さぶってみた。ビックリしたのかもんどり打ってテーブルに激突。

「イタ、イテテ。ああ、お疲れさん……おっ、いいんじゃないか」

もっと感謝してほしいが、まあいいか。ソファで寝て山神さんを待つことにした。

「迎えにきたぞーい」

「あ、山神さん」

山神さんが引き戸から顔だけ覗かせていた。

「どうですか？ キレイになりましたよ」

見て下さいと言わんばかりに手を広げた。

「お、キレイになったか。明後日確認するからの」

帰りの車中で、明日休みだから観光でもしようと思おうと近隣のおすすめスポットやおいしい飲食店を尋ねたら、「運転中じゃ！」とまた怒鳴られた。この土地は山頂の診療所はもちろん、泊まっているホテルも携帯の電波が入らず、ネットにも接続できないので困った。

ホテルでフロントの男性におすすめスポットを尋ねたら、「知らない」と真顔で言われた。コンビニも近くにないようで仕方なくホテルの売店と食堂で休日を過ごした。

暇を持て余した休日が終わり確認日を迎えた。

三人で診療所に入る。

「ウソでしょ……」

え？ 何で？ 清掃したはずなのにどうして？

蜘蛛の巣が張っていて床には泥汚れがこびりついていた。

入った瞬間汚されたというよりも、清掃前の状態に戻っていると感じた。

背筋に冷たいものが走った。

「不合格じゃな。また夕方くるからの」

それだけ言い山神さんは診療所を後にした。呆然としていて何も尋ねることができなかった。

恐る恐るソファに腰かけ兄と相談する。

「キレイにしたのに掃除する前に戻ってる！ これヤバいやつだよな？」

「そうだな。掃除前とまったく同じ状態だしな。やっぱりか……」

「やっぱりって何？ ねえ、逃げようよ！」

私は怖くて足が震えていた。

「逃げるのはおそらく無理だ」

「なんで？」

心臓が破裂しそうなほどドクドク鳴っていた。

「初日に俺ホテルから外に出ただろ。コンビニでも行こうかと山を下ったけど、十分ぐらい歩くとフワッとした変な感覚になってホテル前に戻されてたんだよ。一日中試したけど何度やってもホテルに戻された」

「へ？」

「閉じ込められているかもな。それに、ひょつとするとここ日本じゃないぞ……あ、おい！」

「おい、大丈夫か？」

「私……」

一時間ほど気を失っていたらしい。日本じゃないと言われて血の気が引いた。室内がゆらゆらして見えた気がした。でも意識が戻ったら少し冷静に考えられるようになった。

「どうするの？」

「とりあえず山神さんがくるのを待つ。俺が話を訊く」

二人で待つことにした。山神さんに渡されたお弁当は怖くて食べることができなかった。

「迎えにきたぞーい」

夕方、山神さんが引き戸から顔を覗かせた。

「これどういうことですか？ こどこなんですか？」

兄が訊くと山神さんが診療所に入ってきた。チャーミングだと思っていた山神さんのタレ目とぷよぷよのお腹が少し禍々しいものに見えた。

「どこって九州じゃろ。だが、どんな理屈で室内が元に戻るかは知らん。わしは委託を受けて案内しとるだけじゃ」

「どこから委託を受けているんですか？」

「それは言えん。秘密保持契約みたいなやつじゃ」

「山から出ることができないのは何故ですか？」

兄が怪訝そうな表情で訊いた。

「知らん。辞めれば出られるぞ。清掃を辞めるのは自由じゃ。どうする？」

「……こんなところで俺らは大丈夫なんですか？ 何か害とか？」

兄は腕を組んで山神さんを覗きこむようにして見ている。

「わしはウソつきじゃが、それは大丈夫じゃ。危険は何もない。わしの六十八年の人生をかけてもよい」

「そうですか……それなら続けます」

「ちょっと……」

どうして続けることにした？

私は兄の上着を引っ張るふりをして、わき腹を少しつねった。

「痛っ！ 紗奈つねるな！ まあ聞け。実はな——」

「ええー！」

兄は限定もののプラモデルを買うために生活費に手をつけていたようで、この五十万円がどうしても必要だ、ないと生活がヤバいぞ、と私の耳元で囁いた。

財布の中に三十円しか入っていない自分が脳裏に浮かんだ。

お金がないというのは得体の知れない何かより怖いかも、と思った。

「いいな、掃除続けるぞ？」

「……うん」

「じゃあ決まりじゃな。そしたら明日迎えに行くからの」

清掃二回目。診療所に到着した私たちは作戦会議を開いた。

「清掃前に戻った超常現象は忘れて合格することだけを考えるぞ！」

「うん！」

そうだ！ 合格あるのみ。生活費優先。私は決意を固めた！

「とりあえず前回よりも入念にやってみろ」

やってみろ……この状況でも兄は手伝わないのか。舌打ちをして掃除を開始した。

診療所は半日程度でキレイだと感じる水準になった。前回よりも埃や泥汚れの見落としがないよう注意深く掃除した。

問題はここからだ！ ソファに胡坐をかき瞑想した。

だが……いい案が浮かばず時間だけが過ぎていった。兄は隣でプラモデルの雑誌を読みながら、「一人じゃきびしいか……」と独り言をつぶやいていた。

翌々日の確認日。清掃前に戻っていた。

清掃が合格に達しなかったら元に戻されるようだ。二回目だからか狼狽もしなかった。

清掃三回目。

「俺も掃除をやってやる！」

兄が感謝しろよ！ と言わんばかりの表情で私を見つめる。

「ホントっ？」

どういう風の吹き回し？ 私は仰天して持っていた箒をポロっと落とした。

「紗奈一人では無理だ。二人で力を合わせて合格するぞ！」

「うん！」

丁寧に時間をかけて掃除をした。テーブルやベッドの裏側の見えない部分も雑巾で拭いた。兄が額に汗してモップ掛けをしていた。肩で汗を拭う姿を見て少し感動した。

「やればできるじゃん」

頭を撫でてあげた。手に汗がついたからチノパンで拭いた。

「うっせー」

兄は照れ笑いを浮かべ俯いた。かわいいところあるじゃない。

二人なので行き届いた清掃ができた。引き戸や窓のレール部分の汚れもキレイに掃いてから拭いた。合格基準に達したと思う。

確認日。清掃前に戻っていた。

悔しくて拳をぎゅっと握りしめた。

清掃四回目。悔しさをパワーに変えるため円陣を組んだ。円ではないが。

「こうなったら舐めてもいいくらいにピカピカにするぞ！」

「うん！ やろう！」

二人ではたいて、拭いて、擦って、磨いて！ がむしゃらに掃除した。二人とも汗だくになった。床に少々ついてきた黒ずみも専用洗剤を駆使して、床が傷まないよう注意して取り除いた。清掃後も気を抜くことなく埃がないか人差し指でチェックした。

ソファに腰かけた兄が足を組み感慨深そうな顔をした。

「今日の悔しさは明後日のうれし涙にかわるな。なんかさ、悩んで、苦しんで、落ち込んで、それでも前を向いて努力すると報われるんだよな一、人生ってやつは」

兄が目頭を押さえた。

「うん！ 私もそう思う」

確認日。清掃前に戻っていた。

私はこらえきれず泣いてしまった。

清掃五回目。

「紗奈。いつまで泣いてんだ！ やるぞ掃除！」

「うん。やる！」

涙をパワーに変えて一心不乱に掃除した。

「紗奈。今日ここに泊まるぞ！ おそらくこれでは清掃前に戻る。原因を探ったほうがいいだろう」

「いいけど……ご飯は？」

「大丈夫だ。今日もダメな可能性があると思って、今朝売店で二人分買って来た。いつも翌々日に確認する不自然さをみると明日があやしいが、念には念を入れて今日から泊まるぞ」

「わかった。泊まる！」

その旨を山神さんに伝えると、「おお、そうか」とあっさりしたものだった。

何がどうなって清掃前の状態に戻るのか。確認したい気持ちと恐怖心が混ざり合い不安でいっぱいだったが、兄が売店で買って来たご飯がお菓子だったことで、少しリラックスできた。

もし幽霊が現れたら太刀打ちできないが、念のため箒とモップを手の届くところにおいてその時を待った。

だが日をまたいでも変化はなく時間だけが過ぎた。外はすっかり明るくなり時刻は九時になろうかとしていた。

「あ、どこ行くの？」

「朝の体操」

兄がお尻を搔きながら外に出た。

その刹那まばゆい光がシャワーのように診療所内に降り注いだ。

見ていたら意識が薄れていった……。

ここはどこ？ 夢？ あ、ここ診療所だ！ 待合室のソファだ。隣にご年配の方たちがいる。今より少し昔の診療所かな。え、じゃあ私は昔の診療所にタイムスリップしたってこと？ なんか怖い……と、とりあえず話しかけてみよう。

「あ、すみませんこって、あの、ちょっと……えっ！」

肩を触ろうとしたらすり抜けた。私に気づいてもいない。この人たち幽霊なの？ でも、このご年配の方たち顔色がいい。まさか私が幽霊？ それかただの夢？ 夢だよ。うん、昔の診療所に私がいるという夢だ。うん、そう思おう。ここ歩けるな。診察室だ、医者がいて患者を診ている。あ、もしかして今清掃している診療所はこの状態を求めているとか？ それを私に夢として見せているとか。夢としてね。夢。あとでちゃんと起こしてよね。よし、できるだけ確認してみよう。診療所はキレイで清潔感がある。医者が真剣な顔をしている。診察を終えて安堵した表情の人や笑顔の人もある。あ、倉庫だ、電気がついてないから暗い。あれは何だろう？ 置物かな。わかんないよ。なんか怖くなってきた。どうしたらいいの……。

「おい！ 紗奈ー！」

「あ、私……」

「大丈夫か？ 気を失ってたぞ」

兄が眉を寄せ心配そうな表情で私の顔を覗き込んでいた。

兄が朝の体操を終えて戻ってきたとき、すでに部屋は清掃前に戻っていて、私は気

絶していたらしい。

兄に体験した内容を伝えた。

「まあ最初からだけど、人知を超えているな。こうなったら俺らの思考や理解で何らかの答えをだすぞ。紗奈が体験したことからワードを抽出すれば、キレイ。真剣。安堵。笑顔。これを俺らなりに解釈する」

考えても何も浮かばず一時間以上が経過したとき、兄が顔を上げた。

「少し強引だが俺のプラモデル哲学が一番しっくりくる。プラモは、真剣に作って細部までキレイに仕上げるんだ。で、思ったようにできあがったらホッと安堵する。そして出来栄えを眺めながらニヤニヤと笑顔になるんだ」

兄は何度も頷き確かめるように話をしていた。

「それが何？」

「俺はプラモを作るときプラモのことを思いながら本気で作っている。だから最後に笑顔になれるんだ。要するに紗奈がみた診療所の人たちのこと、そこを使用する人たちのことを、思いながら本気で清掃するということだ」

「あ！ そうかも！」

ハッとした。大切なことを忘れていた。これまでキレイにすることだけ考えていて使用する人たちのことは考えていなかった。

「そうだろ。それと、翌々日に清掃確認する理由は時間が関係していたとわかったが、あと一つ気になることがある！」

「なに？」

「俺たちを山から出られないようにしていることだ。言い方を変えれば行動範囲を限定していることだ。おそらく意味がある。この範囲に何か必要なものがあるはずだ」

「でも診療所とホテルと木しかないよ……」

他にも何かないか考えてみたが思いつかなかった。

「……俺はホテルがあやしいと思う。他に何か見たものはないか？」

「なんか倉庫に大きい置物みたいなのがあったけど、暗くてはつきりわからなかった」

「そうか……とりあえずホテル内を調べてみるか」

「おーい。そろそろ疲れたじゃろ。帰らんかーい？」

ビックリした。山神さんが引き戸を開けて覗いていた。

兄と目配せをしてホテルに戻った。

兄が清掃を三日間休ませてくれ、と山神さんをお願いした。快く了承してくれた。

「紗奈、お前は三日間ゆっくり休め。俺が必要なものを探るから」

「いやだ。私も手伝う」

「ダメだ。お前はここにきて二回も気絶している。それに次の清掃にのぞむためにも俺に任せてお前は体力を回復しておけ！」

兄の表情や話しぶりから熱い思いが伝わってきた。

遠慮なく任せて私は体力回復と、次回の清掃のために用具の手入れや清掃箇所の確認などの作業をすることにした。

清掃六回目。朝、一階のロビーに行くと兄が待っていた。

「ありがとう体力回復したよ。これ何？ あっ！」

私が倉庫でぼんやり見たものと同じものがあつた。

「ホテルを探し回ったら地下倉庫があつて、フロントの男に話をしたら倉庫の扉を開けてくれたんだ。で中に入ったらこれがあつた！」

「これって清掃機材だよ。うちでは使ったことないけど使い方わかる？」

「大丈夫、使い方もある確認した。まあ診療所についてからのお楽しみだ」

診療所に到着した。すぐに蜘蛛の巣の除去から掃除を開始した。

「よし、そろそろこいつの出番だ！ これは床洗浄機だ。タンクに洗剤と水をいれて、とよしスイッチオン！」

洗浄機で床を清掃すると鏡面のようにピカピカに磨きあがっていた。その他にも兄が倉庫から持ってきたワックスでツヤを出して、除菌効果のある洗剤で壁やテーブルを拭いた。

「キレイになったね」

一日かけて掃除をした。清掃中私は、おそらく兄もだと思うが、診療所を使う人たちのことを真剣に考えて、利用する人が気持ちよく使えるようキレイに掃除をした。掃除を終えたとき出来栄えにホッと安堵して、二人ともつい笑顔になった。

すでに夕方になっており、キレイにした診療所を汚したくなくて外で山神さんを待った。

「これだけキレイになったら、もしかしたら合格するんじゃない？」

「たぶん。だがあくまでも俺らが考えた理屈にすぎないからな」

しばらくすると山神さんが迎えにきてホテルまで送ってくれた。

確認日。私たちは朝からソワソワして会話もままならない状態だ。キレイになったという自信は十分あるが、心臓が飛び出そうなほど緊張している。診療所に向かう車中も手を合わせて祈っている。ちらっと目に入った兄も手を合わせていた。

「よし、着いたぞーい！」

「ねえ、着いたって。降りよう」

「ああ」

恐る恐る車のドアを開けて降りた。

「どういうこと？」

あつたはずの診療所がなくなっている。ミステリーサークルのように診療所の基礎の形だけが残っている。

「合格じゃ、おめでとう。いや、ありがとうじゃな」

山神さんがえびす顔でお辞儀をした。

「どういうことですか？」

「どうって、人の往来のない場所にあってもしょうがないじゃろ。ここにあった診療所はそれを必要としている人たちのもとへいったんじゃ」

「天国ですか？」

私はふと、そんな気がしたから訊いた。

「紗奈ちゃんの変なこと言うのお。天国に医療が必要だと思うのか？」

「あ、いらないかもです」

「診療所は医療を必要としている人たちのもとへ。それも利用できるキレイな状態でいくことができたんじゃ」

「はあ、そうなんですね」

納得できたような、できないような複雑な気持ちだ。

「ではホテルに帰ろうかの」

ホテルに戻ったが、ホテルもなくなっていた。私たちの荷物だけが琥珀色のパラソルの下に置いてあった。

「山神さん、これって？」

「知らん。不思議じゃな。わしも驚いて少し漏らしたわい」

山神さんはわざとらしく頭を抱えて驚いたような素振りをする、私たちに清掃の報酬を支払い、山の麓まで送ってくれた。向かう途中、きたとき同様の霧のようなものに包まれて一瞬視界を失った。なんとなく霧の前後で世界が違うような気がした。

「わしは急ぎの用事があつてな。タクシー用意したからここで待ってなさい。二人とも本当にありがとうな」

「こちらこそお世話になりました」

山神さんは満面の笑みで、「ありがとう」と言いお辞儀をして車に乗り込んだ。

私たちはお見送りするために道路沿いに出た。

車が走り出して手を振っていたら、三十メートルほどで車ごとシュッと消えた。線香花火が消えるときのようなだった。兄に目をやると特に驚いておらず一礼をしていた。私も、うすうす山神さんが人間ではない何か、だとわかっていたのでビックリすることもなくお辞儀をした。

タクシーを待つよう指示された場所に戻った。辺りは緑豊かで空気が澄んでいて気持ちがいい。

「ねえ、山神さんって何者かな？」

「さあな。けど山神さん常に宙に浮いていたからな。地面はおろか物にも触れてないんだよ。車の運転もハンドル握ってなかったし」

兄は表情を変えず淡々と話すが、私は気づいていなかったの少し驚いた。

「じゃあ超能力で運転してたのかな？」

「もしかしたらな。それで気が散るから運転中怒鳴ったんじゃないか」

もしそうなら運転中話しかけて申し訳なかった、と思った。

「ちなみに超能力で掃除はできないのかな？」

「どうだろうな。清掃は機材も重いし体力も使うからな。まあそもそも超能力かどうかはわからないけど。人間の手によって診療所を清掃しないといけない決まりがあった可能性もあるし……」

「うーん。どうなんだろうね……」

不思議な清掃依頼だった。考えれば考えるほど疑問点がでてくるが、理解しようにも起きた事実が不思議すぎて納得のいく答えはでそうもない。このさい山神さんが言ったことを全部信じることにした。

診療所はそれを必要としている人たちのもとへ。そう思うと、「キレイにしてよかった」と心から嬉しくなった。

そのとき柔らかい風が吹いて、揺れる木の葉が私たちを労ってくれたように感じた。